

接触場面における「聞き返し」のストラテジー —日本語非母語話者の学習レベルの相違による特徴—

堀内 奈美

接触場面での日本語会話において非母語話者は、聞き取りに問題が生じたとき、聞き返しをすることによって会話相手に調整を求める。非母語話者の用いる聞き返しは母語話者の用いるものと異なる様相を示すだけでなく、日本語学習レベルによっても異なりを見せることが分かった。

キーワード：聞き返し、接触場面、発話形式、発話意図

1. はじめに

日本語非母語話者（以下、非母語話者あるいはNNS）は日本語での会話において、コミュニケーションを円滑に営むためにさまざまなことを行っている。例えば、相手の発話が聞き取れなくて発する「えっ?」「それはなんですか?」「なんと言いましたか?」のような「聞き返し」もその一つである。このような聞き返しは、話し手に自分の不理解を示して調整を求める会話ストラテジーの一種であるといえる。

本研究は、母語話者と非母語話者が参加する接触場面での会話において、非母語話者が使用した聞き返しについて分析し、その差異と特徴について考察していくものである。実際の会話場面では、会話の進め方やストラテジーの使用に関しては、意味内容の伝達に致命的な影響を与えることがないため、黙認されることが多い。特に会話中に会話相手から直接指摘されることは非常に少ないと考えられる。このため、会話場面での非母語話者の使用状態とそこでの問題点を明らかにすることは非常に有意義であると考えられる。

また、従来の聞き返しについての研究は、初級学習者を対象としたものがほとんどで、中級以上の学習者に言及したものはあまり見られない。確かに、初級学習者の特徴を観察して記述し、その問題点を考えることは急務であり、指導する際にも有効であると考えられる。しかし、中上級以上の会話能力を持つにもかかわらず、「不適切な」聞き返しを行って母語話者に不快感や違和感を与える場合もかなり見られる。それぞれの母語にも存在し、比較的簡単に習得できる（と考えられる）ストラテジーであるからこそ安易に使用して「不適切な」使い方をすることによって与える相手へのイメージは、語彙や文法などの誤使用より与えるダメージとして大きいのではないかと考えられる。

まず相手の発話を理解する過程で起きる問題（相手の発話を聞き取ることができない、発話に含まれる語彙の意味が分からない、発話意図を理解することができない等）によって異なる聞

き返しの発話意図とその表現形式について整理し、非母語話者は母語話者の発話に対してどのような発話意図で聞き返しを行っているのか、その表現形式と機能をどのように選択しているのかを明らかにしていきたい。

2. 先行研究概観

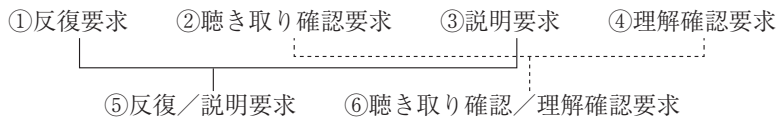
日本語学習者のコミュニケーション・ストラテジーに関する先行研究は数多くあるが、その中でも特に問題解決を目的とする「聞き返し」に言及しているものには、尾崎（1992,1993）、トムソン（1994）などが挙げられる。

尾崎（1992）では、「聞き返し」は相手の話が聞き取れない、分からないという問題に直面し、それを解消するために相手に働きかける方略であるとしている。そして「聞き返し」をその表現形式によって動詞型、名詞丁寧型、名詞普通型、不完全型、間投詞型の5つのタイプに分類し、初級学習者の場合は上級学習者や母語話者と違って動詞型や名詞普通型を多く用いることを報告している。また尾崎（1993）では、聞き返しの発話意図を①反復要求、②聞き取り確認要求、③説明要求、④理解確認要求、⑤反復／説明要求、⑥聞き取り確認／説明要求の6つに分類している（しかし、このように分類しながらも、発話意図を特定できないものもあるとしている）。

(1) 尾崎（1993）による日本語学習者の「聞き返し」

聞き返しの表現形式… { 動詞型・名詞丁寧型・名詞普通型・不完全型・間投詞型
 { エコー型（相手の発話（の一部）をそのままオウム返しにするもの）

聞き返しの発話意図… { ①反復要求（相手の発話が聞き取れなかったとき）
 { ②聞き取り確認要求（聞き取りに自信が持てないときに相手に確認を求める）
 { ③説明要求（相手の発話は聞き取れたが意味が良く分からない）
 { ④理解確認要求（自分の理解が正しいかどうか確認してくれるよう求める）
 { ⑤特定できないもの（上記以外）



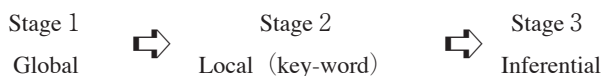
この後に続く研究はこれらの分類に従って、あるいは準じて聞き返しを分類・分析しているものが多い（伊藤1998、大野2001など）。また、尾崎（2000）は、相手の発話をくり返すかどうかによる不定形（聞き返す対象が特定されないもの）、エコー型（相手の発話の一部または全部反復するもの）、非エコー型（聞き返しの対象は特定されるが直前の相手の発話には含まれない語、文節、文が使われているもの）という分類を紹介している。

トムソン（1994）では、初級教科書における聞き返しについて述べ、「聞き返しについて取り上げている教科書はあるものの、練習まで取り入れられているものは少ない」とし、聞き返しなどコミュニケーション・ストラテジーを学習目標として挙げ、教科書でモデルを提示すること、練習させること、実際に聞き返しを使う場面を提供すべきであると主張している。

初級学習者の実際のコミュニケーション場面は様々であるが、猪狩（1999）では、オーラル・テスト場面を取り上げ、学習者が使用したコミュニケーション・ストラテジーに関して分析を行った。学習者はコミュニケーション・ストラテジーを頻繁に使用し、その中でも聞き返しは最も頻繁に使用されているストラテジーであったが、効果という点から見ると、聞き返しを行ってもなかなかスムーズに問題の解決には至らないものが見られた。また聞き返しが必要な場面（聞き返すことに学習者がなれていなかった・聞き返しの表現形式に関する知識が十分でなかった等）で使用されていないというケースも見られたと報告している。

また、Gass&Varonis（1985）は、非母語話者の用いる聞き返しは情報処理レベルの機能と対人関係における相互作用レベルの機能を持つと述べた。Rost and Ross（1991）による学習者の用いる聞き返し及びL2教室での教授可能性を扱った調査では、習得段階の異なる学習者の用いる聞き返しの特徴として、習得段階初期の学習者は母語話者の発話の聞き取れなかった語や語の一部をくり返すことをストラテジーとして用いることが多く、逆に習得段階の進んだ学習者にはこのようなくり返しが現れにくくなることを示した。また、くり返し方（聞き取れた部分だけをくり返す・理解できなかった部分を取り出してくり返す・理解できなかった部分の周辺を別のことばでくり返す等）を観察することによって、学習者の習得段階を推定することができるのではないかという可能性を示唆した。

(2) Rost and Ross（1991）による「学習者の習得段階による一般的リスニングストラテジー一連の発達過程」



聞き手のフィードバック手段と話し手の談話修正に与える影響

聞き手のストラテジー	話し手の反応
Continuation Signal	ナレーションを続ける
Lexical/Global Reprise	全発話 / 区切りの繰り返し / 言い直し
Lexical Gap or Positional Reprise	発話のある特定の部分の繰り返し / 言い直し
Hypothesis Testing	聞き手の Hypothesis check が「正しい」「もっともらしい」かの確認 聞き手の仮定が「間違っている」場合は別の情報を与える
Forward Inference	質問に答える / 聞き手の仮定が内容に一致するかどうか確認 聞き手の予測に合うよう物語を修正 / 聞き手の仮定が間違っている場合は別の情報を与える

(Rost and Ross（1991）より、話し手の反応については筆者が和訳)

3. 研究の目的・概要

本研究では、これらの研究結果を踏まえ、非母語話者が会話の中でどのような聞き返しを行っているのか、またその聞き返しの問題点について考察し、日本語学習者にとって必要な聞き返しとは何かを考える。また、非母語話者が実際にどのような問題を抱えているかに着目し、その問題に対応できるストラテジーについて整理し、学習者が活用できるように提示する。

3.1 聞き返しの定義

尾崎（1993）の定義をもとに「聞き返し」を以下のように定義する。

「聞き返し」…相手の発話が聞き取れない、分からないという問題に直面したとき、その問題を解消するために相手に働きかける方策。

また、聞き返しの認定については、尾崎（2001）の認定基準をもとに、

- (1) 前後の文脈と音調などから判断して、話者が何らかの聴解問題に直面していると推定できること
- (2) 「何？」のような言語表現または「うん?」「ああ?」などの音声表現を伴っていること
- (3) 聞き返しの発話に対して、相手が自己発話に何らかの調整を施していることと設定する。

3.2 調査・分析について

会話は[学習者-母語話者]の二人一組のペアで行われたものをDATで録音、かつビデオテープでの録画を行った。話題はあらかじめお互いの興味のある事柄を事前アンケートで調査して「趣味について話す」こととし、調査開始前に被調査者に指示した。また、比較のために母語母語話者同士のペア5組についても同様の収録を行った。

収録方法については、小磯（1999）の談話の収録方法のうち「状況設定会話」を採用した。状況設定会話は自然性や自発性に問題がないわけではないが、条件の統制が有利であることと音質的に質のよいデータを得ることができるという点を重視した。ただし、今回の調査においては、より自然な会話の収録を目的とするため、具体的な場面を想定して行うロールプレイは行わなかった。

[調査当日の流れ]

フェイスシート記入（約5分）…氏名・年齢・出身地・言語形成地など基本情報を記入
教示 …調査の目的（自然会話の収録）・手順説明
会話収録（約15分） …開始の合図（録音・録画開始）
15分経過した時点で終了の合図

3.3 被調査者

被調査者は日本語学習レベルが初級の非母語話者と母語話者のペアが3組（それぞれ 非母語話者 話者番号：NNS1～3, 20～35歳の関西の大学の語学アシスタント, 来日前はドイツ語あるいは英語の語学教師, 日本語は来日後 約半年・150時間学習／母語話者 話者番号：NS11～13, 20～35歳の関西在住の会社員と大学生および院生）、日本語学習レベルが中級の非母語話者と母語話者のペアが3組（同じく話者番号：NNS4～6, 22～35歳の関西の大学の語学アシスタント, 来日前は英語かドイツ語の語学教師, 日本語学習歴は母国で2～3年, 日本で約半年・100時間学習／話者番号NS14～16, 22～35歳の関西在住の大学院生）である。

母語話者同士のペアは5組（話者番号：NS1～10, 20～32歳の関西在住の会社員・大学生）であった。

なお、親疎関係を一定にするために、各ペアは初対面同士とした。

3.4 分析方法

分析は以下の手順で行った。

- (1) 会話を録音したテープを文字化し、その中から聞き返しを抽出。
(会話例の表記については末尾に記載)
- (2) 文脈と音調から聞き返しと判断できるものだけを抽出。判断できないもの、聞き返しではないものは除外した。
- (3) 抽出した聞き返しを尾崎（2000）にしたがって、①エコー型（相手の発話をそのまま反復する。そのまま反復する普通形、反復した部分+ですかの丁寧形、相手の発話を部分的に反復する不完全形）、②非エコー型（反復を使用しない表現「もう一度お願いします」「なんですって？」など）、③不定形型「ん（↑）」「はい（↑）」などの音声的なものと「すみません」など表現として用いられたもの）に分類した。
- (4) 発話意図については、尾崎（1992）の分類に従い、①反復要求、②聞き取り確認要求、③理解確認要求、④説明要求の4つに分類した。

尾崎（1992）では、いずれにも属さないものとして⑤反復／説明要求および⑥聞き取り確認／説明要求の2つを加えているが、今回の分析では会話協力者に発話意図を確認する目的でのフォローアップ・インタビューを行っていないため、①～④の分類を採用した。

4. 分析

4.1 非母語話者の聞き返し

まず、抽出した聞き返しを表現形式から以下のように分類した。

(表1) 表現形式による聞き返しの分類

表現形式	下位分類	説明(発話例)
①エコー型	①-1 直接エコー	相手の発話をそのまま反復する
	①-2 エコー + a	「反復した部分」+ですか、って 等
	①-3 不完全エコー	相手の発話をくり返しているが、発音や発話の長さなどの問題により完全にくり返すことができていないもの
②非エコー型		相手の発話を反復しない表現 「もう一度お願いします」等
③不定形型	③-1 音声的不定形	「はっ(↑)」「えーと」等
	③-2 統語的不定形	「わかりません」等

①エコー型

①-1 直接エコー (相手の発話をそのまま反復する)

NS : 今日もアルバイトなんですよ。○○(固有名詞) っていう居酒屋で。

NNS : ○○ (↑)

NS : 趣味はなんですか (↑)

NNS : しゅみ (↑)

①-2 エコー + a (「反復した部分」 + ですか、「反復した部分」 + って 等)

NS : それは大変でしょう (↑)

NNS : た たいへん たいへん って (↑)

NS : ああ 時間はどのくらいなんですか (↑)

NNS : じかんー (↑) じかん ですか (↑)

①-3 不完全エコー型 (相手の先行発話をくり返しているが、完全にくり返すことができていないもの)

NS : 1週間にどれくらいするんですか (↑)

NNS : どれ・・・どの・・・どれ・・・

NS : お国での専門分野はーなんですか (↑)

NNS : せん せんー せんこー (↑)

①のエコー型については、①-1直接エコー型、①-2エコー + a型、①-3不完全エコー型の3つの下位分類を設けた。これらエコー型の聞き返しは、単純に聞き取れなかった、あるいは発話された語句や表現を知らないなどの場合に使用されることが多い。会話を続けるストラテジーとしては母語とそう変わりがないためか、日本語学習レベルが初級の非母語話者にも使い

やすく、多用されていると考えられる。また、これらの聞き返しは発話意図が相手に伝わりやすく、対話相手も的確に調整行動を行っていたため、会話は途切れることなく続行されることが多かった。用いられる聞き返しの中でも最も効率のよいストラテジーであるといえる。

②非エコー型（相手の発話を反復しない表現）

NS : 夏休み中はどうなさるんですか（↑）

NNS : はい。もう一度お願いします。

NS : 趣味のことはなしましょう

NNS : なんですか（↑）

②の非エコー型は相手の発話を反復しない聞き返しであり、母語話者・非母語話者にかかわらずよく見られた聞き返しであるが、母語話者と非母語話者の使い方には大きな差異があった。母語話者はこの聞き返しを場面や文脈によつて的確に使い分けているのであるが、非母語話者（特に初級学習者）では表現も限られており、同一表現を何度もくり返してしまうことが多く見られた。また、他の言いかえなどを用いることがないため、何を聞きたいのか相手に伝わらないことも多く、効果的に使えているものが少なかった。加えて非エコー型の聞き返しの場合、会話相手には聞き取れない、あるいは理解できていない箇所を特定することが難しく、会話が途中で破綻したり、理解の齟齬を生んだりすることが多く、結局会話が中断されたり話題が別に移っていったりする場合が多かった。母語話者同士では話の筋が通らない場合はお互いにやりとりをしながら話の内容を理解し修正していくことができるが、非母語話者との会話の場合、そこで理解を放棄し、他の話題に移るなどすることが多く、非母語話者にとってかなり効率の悪い聞きかえしであるといえる。

③不定形型

③-1 音声的な不定形型

NS : ▽▽（固有名詞）ってご自宅の近くです（↑）

NNS : はっ（↑）

③-2 統語的な不定形型

NS : □□（固有名詞）って阪神高速沿いでしたっけ

NNS : えーと わかりません

③の不定形型は非母語話者によってかなりばらつきが見られたが、話者によっては多用している聞き返しであった。相手の発話が聞き取れても意味内容が理解できない場合だけでなく、使われている語句や表現が分からない場合に用いられている。このため、会話相手には「何が問題なのか」ということが明確に伝わらず、適切な調整が得られずに会話が破綻したり、何度

も聞き返しが行われたりすることが多々あった。フレーズとして覚えてしまうと、使いやすいものではあるが、問題のある場所を明確に伝えられないなど、問題が残る場合が多い。

上記の分類に従って、収集した会話データに表れた聞き返しを分類した。

(表 2-1) 非母語話者が使用した聞き返し (接触場面)

形式 話者番号	エコー型			非エコー型	不定形		計
	直接エコー	エコー+a	不完全エコー		音声的	統語的	
NNS1	6	0	0	10	7	3	26
NNS2	7	1	1	12	6	2	29
NNS3	5	0	1	5	4	3	18
NNS4	4	2	5	4	3	5	23
NNS5	5	3	2	5	2	1	17
NNS6	3	4	2	8	2	2	23

(単位：回)

(表 2-2) 母語話者が使用した聞き返し (母語場面)

形式 話者番号	エコー型			非エコー型	不定形		計
	直接エコー	エコー+a	不完全エコー		音声的	統語的	
NS1	0	3	1	0	4	0	8
NS2	2	1	0	0	2	0	5
NS3	1	5	0	0	4	1	11
NS4	0	2	0	1	3	0	6
NS5	0	2	2	0	1	0	5
NS6	3	4	0	0	2	0	9
NS7	0	2	0	0	2	0	4
NS8	1	3	0	1	3	0	8
NS9	2	1	0	0	3	1	7
NS10	4	3	1	0	2	0	10

(単位：回)

調査データから明らかになった非母語話者全体の聞き返しの特徴は以下の通りであった。

- (1) 聞き返しの表現が限られている。
- (2) 不定形（「分かりません」「なんですか」）の多用。
- (3) 質問が聞き取れても、その意味を理解していない場合が多く、その際聞き返しが適切に行われていない。
- (4) 多用されているのは質問や語句の意味がわからない場合の聞き返しである。

非母語話者は会話が続ける際にコミュニケーションストラテジーを多用し、それらの中でも「聞き返し」はかなり頻繁に使っているのであるが、会話が続けるのに効果的に使用されてい

るかということに関しては問題が残るものが多かった。

全体的に見て、使用している聞き返しの表現にバリエーションがなく、限られている。話者ごとに見ても、同じ表現を多用しているのが分かった。特に初級では相手の発話の一部（特に語彙の一部）の反復による聞き返しがほとんどであった。中上級でもエコー+ α 型で「～って」「～とは(↑)」などの表現が使えていても同じものを複数回多用していることが多かった。知っている（習得した）ストラテジーを忠実に使うが、バリエーションが少ないといえる。

(1)(2)については、学習者（特に初級学習者）の用いる聞き返しのほとんどが「え(↑)」「は(あ)(↑)」などの不定形型と直接エコー型「(相手の発話の反復)(↑)」、「分かりません」であり、「(相手の発話)って(↑)」「(相手の発話)ってなんですか(↑)」など、母語話者が使い分けている聞き返しの表現がほとんど使われていないことが挙げられる。初級レベルの学習者では、まだ聞き返しの表現をよく知らず、「分かりません」などの表現を多用することが多いと考えられる。しかし、「え(↑)」「は(あ)(↑)」など不定形型の場合、会話相手に発話意図（もう一度くり返してほしい、分からない単語の説明をして欲しい等）がうまく伝わらず、会話が別の方向に進んでいったり、話題が中断してしまったりすることが多々あるため、これだけでは不十分であると考えられる。

(会話例1) アルバイト先について

NS11 : えーえーと ○○(NNSのアルバイト先の名称)って阪神高速沿いでしたっけ？

NNS1 : えーと わかりません

NS11 : そうですね。じゃあ 留学生ってアルバイトはどのくらいできるんですか(↑)

[話題の回避]

会話例1では、母語話者が会話相手（非母語話者）のアルバイト先の場所について更に質問をしたが、非母語話者は「阪神高速」が何か分からず説明を求めたいのに「分かりません」を使ったため、「何が」分からないのか不明のままその話題は別の話題に移ってしまった。非母語話者が語句の意味の説明を期待するのであれば、何が分からないのか（聞き取れないのか、意味がわからないのか）という発話意図をはっきり伝える必要がある。この場合、「分かりません」はあまり効果的ではない。母語話者は理解できていない（あるいは聞き取れていない）ことを明確にするために、「(聞き取れない語・表現)ってなんですか」などを使い、調整を求めている。一方、続く会話でも「どのくらい」がうまく聞き取りができず、聞き返しを行っているが、これも「分かりません」でなく「どのくらい(↑)」「どのくらいって(↑)」など分からない語をくり返すなどすれば、相手に発話意図が正しく伝わり、適切な調整が行われるはずである。

(会話例2) (会話例1の続き)

NS11 : 留学生ってアルバイトはどのくらいできるんですか？

NNS1 : も もう一度言ってください

NS11 : りゅうがくせいって アルバイトは どのくらいできるんですか？

(単語と単語を区切って全体的にゆっくりめに発話)

NNS11 : えー あ あー 分かりません

NS1 : あ アルバイト、わかります? どのくらい うーん なん なんじ?

NNS11 : あ、how long? (↑) ああ 2時間くらいです

このような「聞き返しをしても何について聞いているのか」が明確にならない聞き返しは必要な応答を引き出せず、効率が悪い(会話例2でも1回のやりとりでは問題が解決できず、同様の聞き返しを再度行っている)。適切な聞き返し表現を知っていればより少ないやりとりで解決できると考えられる。

一方、母語話者同士では、以下のような聞き返しが見られた。

(会話例3) 趣味について(母語場面)

NS9 : 趣味のこと 聞いてもいいですか えーと ご 趣味は・・・

NS10 : 趣味は音楽を聞くことです 邦楽メインですね

NS9 : ほ ほうがく ですか

NS10 : ええ あの あ につぼんのって {笑}

NS9 : ああ 「邦楽」ね {笑}

NS10 : そうそうそう {笑}

最初の聞き返し(「ほ ほうがくですか」)は、接触場面で非母語話者が多用するものと同様相であるが、その後のやりとりで相手に理解確認を行っているため、スムーズに会話が続いている。

また、接触場面でも、母語話者は以下のような適切な聞き返しを行っている。

(会話例4) アルバイト内容について

NS12 : アルバイトって何やってるんですか (↑)

NNS2 : さ さら さらあらうー うー さらあらう (↑) ファミレスでおさら

NS12 : さらあらう (↑) {笑} お皿洗いでしょうか

NNS2 : そうそう さらあらい{笑}

会話例4では、非母語話者が「皿洗い」を「さらあらう」と間違えて発話しており、対する母語話者は聞き返しを行っているが、「さらあらう (↑) (聞き取れなかった・理解できなかった語) + でしょうか」で不明部分を明確にし、確認をしていたため、お互い混乱することなく話を続けることができたのである。

次に(3)の質問などが聞き取れても意味が分からない場合については、

(会話例5) アルバイト内容について

NS12 : お皿洗いのバイトですか たいへんじゃないですか (↑)

NNS2 : た たいへん たいへんってなんですか (↑)

(会話例6) 趣味について

NS13 : えいが 映画が趣味っておしゃったけど どんな映画をみるんですか

NNS3 : {沈黙} わかりません

NS13 : あー じゃあー どれくらいみます (↑) 週になんかい

(「趣味」という語の意味が分からなかったが、それを明確にせずに「分かりません」と答えたため、母語話者はその話題をそこで打ち切ってしまった)

上記2例からも分かるように、非母語話者(特に初級)には「聞き返し」の手段や表現形式についての知識が不十分であるとわかる。このような曖昧な聞き返しを行うことで、聞き返しの意図や聞き返している内容が的確に伝わらないと、コミュニケーションに混乱が引き起こされ、両者に負担が生じたり、コミュニケーションが中断されたりする恐れがある。

母語話者が行った聞き返しのうち、「～ってなんですか」「～はどういう意味ですか」は不明な部分についての説明要求であることがはっきりしており、これらの聞き返しではお互いの混乱が生じることが少ない。このような不明箇所を明確にしつつ発話意図が明示されている聞き返しをある程度類型化しストラテジーとして使用する場面とともに提示しておくことが有意義であると考えられる。聞き返す場合にもいろいろな状況があるが、それぞれの目的に合う表現形式を提示しておく必要があると考えられる。

4.2 非母語話者(初級)の「聞き返し」

今回の調査では、非母語話者(初級)は相手の発話をそのままくり返す「直接エコー型」の聞き返しを非母語話者(中級)より多く用いていることが分かった。その一方で「(相手の発話の一部) + ですか」「(相手の発話の一部) + って (↑)」のような「エコー + a 型」の聞き返しの使用は非母語話者(中級)の半分くらいにとどまっている。

尾崎(1992)は、初級学習者の「動詞型聞き返し」(本研究では「非エコー型」)依存を挙げ、その理由の1つに教室活動を挙げており、トムソン(1994)ではもう1つの理由として、学習者が「名詞型聞き返し」を行うためには、その「名詞」部分が聞き取れていなければならず、初級学習者の場合はこれができていないため、「動詞型」を多用するのだと述べている。母語場面と接触場面は根本的に違う(ネウストプニー(1989)) ことより、「もう一度言ってください」という母語場面では不自然な表現も、初級学習者を含んだ接触場面では不可欠だといえる。しかし、母語場面でも特に不自然さを感じさせない「エコー + a 型」(「～ですか」など)を導入することは有意義なのではないかと考える。

また、非母語話者(初級)が相手の発話の聞き取れた部分のみをくり返す「不完全エコー型」の聞き返しを非母語話者(中級)の半分程度しか使っていないのは、相手の発話自体を聞き取

れていない、聞き取れてもそれをうまくくり返せないことが理由として挙げられる。

また、上述したように初級学習者は「もう一度お願いします」などの非エコー型の使用がかなり多くなっているが、その語のやりとりを観察すると1回のやりとりで問題解決に至っている例は少なく、その後同じようなやりとりが数回続いたり、話題を回避したり、中断したりという結果になっているものが散見された。

(会話例7)

NS12 : じゃあ バイトのない日は飲み[に]行ったりするんですか (↑)

NNS2 : もう一度お願いします

(NS12はここで自己発話をくり返したり、言い換えて説明したりせず、そのまま話題終了)

(会話例8)

NS13 : おもしろいですねー そういうのって だれかに相談したりするんです (↑)

NNS3 : んー そう もう一度言ってください

NS1 : そうだん そうだんしますか (↑) だれかに {言い換え}

NNS3 : わかりません

(話題終了)

さらに初級学習者は中上級学習者に比べ「音声的不定形型」の聞き返し(「あー」「んーんー」など)を使う回数が多かった。いずれも発話意図が明確でなく、会話を続けるには不適であるといえる。

4.3 非母語話者(中級)の「聞き返し」

4.2で非母語話者(初級)の用いる聞き返しの不十分さを挙げたが、非母語話者(中級)の用いる聞き返しがすべて適切に使われているとは限らない。例として、一般的な初対面同士の会話では不適切といえる聞き返しを挙げる。

(会話例9)

NS16 : じゃあ 先週は「△△△(映画のタイトル)」を見に行ったんですか (↑)

NNS6 : {NSの発話が聞き取れず} ああ (↑) {かなり大きな声で}

聞き返しとしての表現形式自体は悪くないが、声が大きく、ぶっきらぼうな言い方だったため、会話相手の母語話者はしばらく沈黙してしまった。会話収録語のフォローアップインタビューでこの箇所について確認をしたところ、NNS6は不適切な聞き返しをしたとは思っていなかったが、NS16は「相手に怒られたように感じた。びっくりした。」と述べた。中国語を母語とするNS6にとっては、大きな声で「ああ(↑)」と聞き返すのは自然で特に問題がある

とは気づいていなかった。

4.4 発話意図の分類

本研究では、尾崎（1992）で分類された「聞き返し」の6つの発話意図に少し修正を加え、以下のように分類する。

[聞き返しの発話意図]

- ①反復要求 : 相手の発話が聞き取れなかったときに聞き取れなかった発話（の全体あるいは一部）反復するよう要求する。
- ②聞き取り確認要求: 発話の聞き取りに自信が持てないときに正しくとれているかどうか相手に確認を要求する。
- ③理解確認要求 : 相手の発話内容に対する理解に自信が持てないときに自分の理解が正しいかどうか相手に確認を求める。
- ④説明要求 : 相手の発話を理解できなかったときにその発話に対する説明を要求する。

③の理解確認要求については、語彙レベルの意味をや内容を確認するのではなく、相手が伝えたいことについて自分の理解が正しいかどうかの確認を求めるものである。

4.4 発話意図との関係

従来の研究では、「相手の発話を聞き取ることができない、または理解することができない」という問題に対して聞き返しは行われているとされ、具体的にどのような問題に対して実施されているのかは特定されていなかった。しかし、相手の発話を理解する過程で起きる相手の発話を聞き取ることができない、発話に含まれる語彙の意味が分からない、あるいは発話意図を理解することができないなど、どのようなことが問題になったのかによって聞き返しの発話意図は異なってくる。非母語話者は日本語母語話者の発話に対してどのような発話意図で聞き返しを計画しそれを表層化するためにどのような機能と表現形式を選択しているか、明らかにする必要がある。

林（2007）では、非母語話者が聞き返しをする際に必ずしも自分の発話意図に合った聞き返しの表現形式を選択できていないことを明らかにした。また、母語話者に対するフォローアップ・インタビューから、聞き返しの発話意図が必ずしも表現形式からだけ理解されるのではないことを明らかにした。これらのことから、聞き返しの発話意図は表現形式だけでなく、文脈などを振り返ったり問題を推測したりすることによって理解される場合があることを指摘している。

学習者が目標言語でコミュニケーションを行う場合、言語能力の低さから何らかの困難に遭遇したとき、その困難を克服して会話を続けていく、いわゆるコミュニケーションストラテジーが必要である。「聞き返し」は聞き手が相手の発話を聞き取れなかったり、相手の言っている言葉の意味が理解できなかったり、自分の理解が正しいかどうかを相手に確認したりするとき

に用いられる。

学習者が目標言語でコミュニケーションを行っていて、その過程で言語能力の低さから何らかの困難に遭遇したとき、それを克服してコミュニケーションを続けていく力をつける必要がある。(表3)は「聞き返し」戦略の機能ごとの出現回数の結果を示したものである。

(表3) 機能別の「聞き返し」出現回数

機能	母語話者	初級学習者	中級学習者
反復要求	12	31	19
聞き取り確認要求	6	37	29
説明要求	15	4	10
理解確認要求	23	1	3

(単位：回)

(表3)を見ると、母語話者は説明要求及び理解確認要求のために「聞き返し」を行うことが多いのに対し、学習者は反復要求及び聞き取り確認要求のために用いることが多いということがわかる。また、この傾向は中・上級学習者より初級学習者のほうが顕著であるが、これは日本語能力がじゅうぶんでない初級学習者の場合、相手の発話を「聞き取る」ことに集中してしまうため、そこから一段進んだ「理解」確認や、語彙説明の要求まで到達しないからであると推察できる。

また、母語話者は反復要求の機能として用いる場合、ただ聞き取った部分だけをくり返すことがあまりないが、初級学習者は多用していた。(母語話者は「聞き取った部分+ですか/って/を？」など後ろに何か付け加えることが多い。)あるいは、言語表現としてではなく、沈黙することで相手にもう一度発話をくり返させることも多かった。

さらに、母語話者は文末の助詞(「よ、か、よね、ね」など)を使い分けたり対話理解に有効なディスコースマーカー(「～わけですよ、～んですよ」など)を付け加えることによってくり返しを冗長なものとせず、効果的な聞き返しを行っているが学習者はそこまで使い分けができていなかった。

5. 今後の課題

以上、非母語話者が用いている聞き返しについて記述してきたが、聞き返しの認定や発話意図を明確にするためには、研究者の判断だけでは不十分であり、フォローアップインタビューが必要であると考えられる。また、現在のところは実際に生成された言語形式のみを対象にしているため、聞き返しの生成過程にまで迫ることができない。加えて実際に聞き返しが生成される調整計画の段階で聞き返しが回避され、問題解決のために別の話題に進むことも考えられるが、現段階ではこのような「聞き返し」に至らなかったものについても扱うことができない。聞き返しの生成過程や回避がどのように起こるのか明らかにするためにも、聞き返しを生成する際の意識についても併せて検討していく必要がある。

また、今回の会話データから聞き返しは1回のやりとりで問題が解決するとは限らないこと

が分かっている。特に接触場面でのインターアクション問題は1回だけの調整交渉で取り除かれない場合のほうが多い。これをどう扱うかについても検討が必要である。

〈会話例の表記について〉

1. 原則として通常の慣習的表記に近い漢字仮名まじりで表記する。
2. 発話と発話の間のポーズは一字分あける。
3. その他の記号
 - … 発話の途中で詰まったり言い直したりした部分
 - (↑) 上昇音調の発話
 - ? 明らかに相手に尋ねていると分かる発話, 疑問文を示す (必ずしも上昇調イントネーションを伴うとは限らない)
 - 長く伸ばされた音節
 - { } 非言語要素・周辺言語情報 (笑い・身振りなどで特記すべきと思われるところ)
 - 、△△、▲▲ 個人名・地名など

参考文献

- 猪狩美保 (1999) 「初級日本語学習者の「聞き返し」のストラテジー～初級日本語教科書との関連から～」『横浜国立大学留学生センター紀要』第6号
- 伊藤かな (1998) 「初級日本語授業における学習者の「聞き返し」の特徴」『岐阜大学留学生センター紀要』創刊号
- 大野陽子 (2001) 「初級日本語学習者の「聞き返し」のストラテジーと日本語母語話者の反応」『三重大学留学生センター紀要』第3号
- 大浜のい子 (1998) 「日本人の言語行動 - 談話展開のためのストラテジー-」『広島大学日本語教育学科紀要』8 広島大学教育学部日本語教育学科
- 尾崎明人 (1992) 「接触場面の訂正ストラテジー - 「聞き返し」の発話交換をめぐる-」『日本語教育』81号
- (1993) 「「聞き返し」のストラテジーと日本語教育」『日本語研究と日本語教育』名古屋大学出版会
- (2000) 「接触場面における在日ブラジル人と日本人のコミュニケーション・ストラテジー: 「聞き返し」の発話交換から日本語習得へ」第6回社会言語科学会
- 小磯花絵 (1999) 「談話研究を支える会話コーパス-その作成と利用の仕方」『日本語学』18-11
- 林里香 (2004) 「「接触場面における意味交渉における発話意図と問題解決の関係」『多文化共生社会における言語管理 接触場面の言語管理研究』Vol.4 (村岡英裕編)
- (2007) 「接触場面における「聞き返し」調整計画についての一考察」『人文社会科学研究』第14号 千葉大学大学院人文社会科学部研究科
- トムソン・木下千尋 (1994) 「初級日本語教科書と「聞き返し」のストラテジー」『世界の日本語教育』第4号
- ネウストプニー、J. V. (1989) 「外国人場面の研究と日本語教育」『日本語教育』第67号
- Varonis, E.M., Gass, S.M. (1985) "Miscommunication in native/nonnative conversation" *Language in Society* 14-2 :

327-343

Rost, M. & Ross, S. (1991) "Learner use of strategies in interaction: typology and teachability" *Language Learning*
41-2 : 235-273